

# 被災地の子どもたちに「遊びの道具」を！

多田千尋（東京おもちゃ美術館館長）

## はじめに

「津波に流されないように丈夫な家をつくるんだ」

これは、私たち東京おもちゃ美術館が取り組んでいる被災地支援の活動「あそび支援隊」の訪問地、陸前高田市の避難所のプレイコーナーで、積み木遊びに興じていた子どもがふと漏らした言葉だ。

平成23年3月11日の未曾有の震災後、東京おもちゃ美術館は岩手県の陸前高田市や宮古市、宮城県の気仙沼市を中心に、「遊び支援隊」を結成し、おもちゃの遊びケアの被災地支援を150カ所で実施した。

震災では多くの子どもたちが家族との別れを経験し、また住まいだけでなく楽しかった思い出も津波とともに流され、大きな喪失体験を味わった。よくそうした子どもは、自分の内にある想いを表出することでつらい思い出や体験を乗り越えていく必要があると言われるが、このひとこまは、「おもちゃ」や「遊び」がそうした想いを表出するためのツールとして、大きな役割を果たすことを実感できた瞬間でもあった。

## 東京おもちゃ美術館としてできること

東京おもちゃ美術館は、10年ほど前から、被災地の一つである岩手県陸前高田市社会福祉協議会と太いパイプで結ばれていた。陸前高田市の主任児童委員のメンバーが東京おもちゃ美術館の監修の下、市社協との連携で「おもちゃの広場」活動の実践をたくましく展開していたのである。おもちゃが取り持つご縁が生まれていた。しかし、このたびの津波により、市社協は会長をはじめ、ほとんどの専任職員を失うことになった。その市社協の残されたスタッフから、市内の多く

の保育園、幼稚園が被災し、おもちゃや遊びの環境がズタズタに破壊されたこと、また避難所にいる子どもたちのストレスが高まっていることなどの情報が寄せられた。

そこで考えたのが、「あそび支援隊」の結成だ。これは「あそびの達人」たる「おもちゃコンサルタント」（ヒト）が、優良なおもちゃである「グッド・トイ」（モノ）と、デザインされた6畳ほどのフロアパネル（環境）を一緒に現地に届け、「おもちゃ」と「遊び」を通じて子どもたちに笑顔になってもらおうという活動で、この「ヒト」「モノ」「環境」の3点セットを被災地の避難所や保育園、幼稚園、児童館、学童クラブ等々に届けるといったものだ。

100社を超えるメーカーや玩具作家に連絡をしたが、そのほとんどが活動の趣旨に賛同して、私たちが思い描いていた以上のおもちゃを快く寄贈してくださった。その数、1万点以上。日本国内だけでなく、フランスの積み木メーカーやドイツのぬいぐるみメーカー、ベルギーの玩具メーカーなど世界各国からも、続々とおもちゃが届けられた。こうして集まったおもちゃは、300箱の丈夫なおもちゃ箱に収められ、100人以上のボランティアが直接被災地を訪問し、寄贈してきた。

## あそび支援隊のスタート

第1陣として、4月9日に伺った気仙沼の仙翁寺は500年の歴史を持つ古刹であったが、300人を超える被災者の私設避難所となっていた。地域コミュニティの結びつきが強いことから、公的支援が来る前から自分たちの力で食料調達や、炊事場、風呂の設営、水や薪の確保などを行っており、大人も元気で活気があっ



グッド・トイ。遊びの環境セット



世界中から1万個のおもちゃが集まった



「あそび支援隊」。学生100人、地域住民50人、おもちゃコンサルタント70人が作業を共にした

た。ここで、遊び支援隊は「おもちゃの広場」を展開した。

子ども（乳児～中学生）約40人、その保護者約15人、お年寄り約10人という大人数が本堂に集まった。

おもちゃを広げるやいなや、子どもたちは元気に遊び始めた。避難所ではなく自宅にいる（あるいは自宅に戻った）子どもたちも来て、久しぶりの再会に皆、大喜び。親同士も地震後初めて再会した人もいて、「おもちゃの広場」開催が人と人の出会いの場となった。

お年寄りは、初めのうちは子どもたちの遊ぶ姿を微笑ましく眺めていたが、「お手玉をやりませんか」と声をかけると、最初は照れていたが、すぐに昔を思い出して見事なお手前を披露。私も私も……となって、会場はそれぞれが得意技を披露するお手玉大会に様変わり。子どもたち以上に盛り上がり、「こんなに笑ったの、久しぶり」。笑いの渦が広がった。

また、お手玉入れとして持っていった巾着袋を見て、「これなら私も作れる」という方がいたので、お寺に頼んで布と裁縫道具を調達すると、今度は巾着袋製作会に様変わり。皆さん、30分足らずで巾着袋を作り上げた。

シニアの方々、特に女性は、避難所で暇を持て余しているところもあり、ちょっとした材料があればいくらかでも物を作ったりすることができるようだ。

子どもたちの遊ぶ姿がシニアの方々の心に火を灯し、ストーブの前で傍観者に徹していた受動的な姿勢

を前のめりにさせた。「自分のためには頑張れないけど、子どもや孫のためなら元気が出てくる」と話しかけてくださった方もいたが、世代間交流による効果は、被災地でも計り知れない。生活の張りが失われつつあった高齢者に出番を作るという「ケア」と、遊びを通じて子どもと結びつけるという「世代間交流」は、心の癒しを求めている被災地においていよいよ必要であるという実感を持った。

### あそび支援隊の特徴

「あそび支援隊」は、他の支援物資と同じように、おもちゃをただ単に届けるというのではなく、おもちゃの専門家であり、遊びの達人である「おもちゃコンサルタント」が届け、現地で一緒に遊び、その地域のリーダーに託してくるというスタイルが、最大の特徴である。

東京本部から被災地に向けて実施している取り組みのほかに、岩手支部、宮城支部、さいたま支部の合計3つの地域グッド・トイ委員会（支部）も、各地にいるNPOの会員、おもちゃコンサルタントのネットワークを最大限に生かして、それぞれに活動を展開している。

そうした活動に共通して言えることは、被災地の子どもたちが「遊び」を通して、子どもらしい瞬間を取り戻しているということだ。避難所での生活は、いろ



青空おもちゃひろば（陸前高田市・松峯公民館）



積み木に夢中になる避難所の子どもたち（陸前高田市・米崎保育園）



いろいろな意味で制限があり、子どもは子どもなりに自分を押し殺して、「いい子」になって過ごしていることが多い。だからこそ「遊び」を通して子どもらしく、自分らしく過ごせる時を保障していけることが大切なのだと思う。

一方、活動を始めて、すぐにわかったことは、おもちゃ・遊びのニーズは避難所の子どもたちだけでなく、むしろ自宅にいる（あるいは戻った）子どもたちに、とても強くあることだ。特に、幼稚園や小学校が再開される前は要望が多く、そうした状況を受けて、広く地域に呼びかけた形で「あそび支援隊」の活動を実施することにした。

また、4月上旬の先発隊の取り組みでは、保育所、幼稚園の被害の深刻さも浮かび上がった。建物そのものが全壊・半壊したところだけでなく、水につかっておもちゃが使えない、流されたというところも多数存在していることが判明したのである。こうしたニーズに対して、気仙沼では、ある保育士の方を中心に市内の保育所、幼稚園、児童館等に呼びかけて、おもちゃの必要性を把握し、必要なところにおもちゃを送るようにした。

## 被災地支援で学んだこと

「あそび支援隊」のこれまでの活動を振り返ると、大きく【第Ⅰ期】ニーズ把握期、【第Ⅱ期】活動拡充期、【第Ⅲ期】文化定着期の3つの段階に分けられる。

まず【第Ⅰ期】では、試行的に「あそび支援隊」を行いながら、おもちゃや遊びに関するニーズについてリサーチし、私たちの取り組みが現地ニーズに合うものになるよう目指した。この活動の中で、以下のようなことが把握できた。

- ①避難所、特に学校に設置されたおもちゃ・遊びのニーズは急速に縮小傾向にある。一方、自宅に戻った子どもたちのおもちゃ・遊び環境は貧弱である。
- ②保育園、幼稚園再開に向けて、「おもちゃ」のニーズが非常に高い。

③子どもだけでなく、大人・お年寄りにも、おもちゃ遊びが必要である。

④本部だけの動きでは、限界がある。日本グッド・トイ委員会の支部の他、他団体との連携の可能性を積極的に探っていくことで活動に幅が出てくる。

⑤おもちゃの中でも、木のおもちゃの持つ力を再確認。特に積み木は多世代に受け入れられ、また遊びの広がりもあるので大好評だった。

ただ、第1弾で足を運んだ陸前高田市、気仙沼市でも、地域ごとに大きく状況は異なり、また時々刻々と状況が変化することから、現地との情報共有を密にする必要性を痛切に感じた。そしてこうして把握した情報をもとに「あそび支援隊」を本格化させて、【第Ⅱ期】では以下のような活動を行った。

①について。避難所での「おもちゃの広場」の実施の際に、地域の子どもたちにも参加を呼びかけ、広場に來てもらった。

②について。第1弾の活動で出会った気仙沼市内の保育所で働く保育士に働きかけ、広く市内の保育園、幼稚園へのおもちゃの寄贈を計画し、「気仙沼プロジェクト」として動き始めた。結果、合計30ヶ所以上の保育所、幼稚園等から希望が寄せられ、おもちゃセットを寄贈した。

②について。「お手玉プロジェクト」をスタート。また「福祉文化セット」の寄贈も開始。

③について。地域グッド・トイ委員会（支部）との連携が本格化。活動が日常的になり、情報収集が細やかになったため、地域の実情に合わせた活動の展開が可能となり、他団体（NPO・NGOなど）の活動とも補完し合いながら、活動の幅を広げることができた。

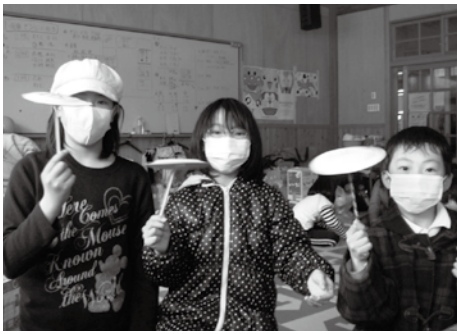
こうして、あっという間に230箱のおもちゃセットが被災地に届けられると、8月には私たちの考える「おもちゃ」「遊び」の重要性を被災地の方々に伝え、末永く寄贈したおもちゃセットが生かされることを目的に、気仙沼で被災地版「グッド・トイキャラバン（木育キャラバン）」（移動おもちゃ美術館事業）を開催し



積み木は熱中を創り出す道具（気仙沼市・階上中学校）



老若男女に役立つコミュニケーションゲーム（気仙沼市・小泉デイサービスセンター）



遊びを通じて、子どものつぶやきを聞く  
(陸前高田市・第一中学校)



お手玉を入れる巾着袋を子どもたちのために製作。ひと肌  
脱ぎたい地域シニアたち(気仙沼市・仙翁寺)

た。【第Ⅲ期】の活動である。

全国のおもちゃコンサルタントも参加したこのイベントには、2日間で約700人が来場。「あそび支援隊」に来てくれていたお子さんだけでなく、おもちゃセットを届けた保育園、幼稚園の関係者も来られて、「グッド・トイ」がかなり浸透してきていることがうかがえた。「おもちゃの広場」セットを150ヶ所に届ける段階から、サーカス一座のように移動おもちゃ美術館を開催する段階へ、さらにその定着にと、私たちの支援も形を変えていったのである。

## おわりに

冒頭で紹介した、お手玉と巾着袋のエピソードには続きがある。

巾着袋を作ってくれた時、「地震の後、避難所でずっと暮らしているが、裁縫をやったのは今日が初めてだよ。毎日単調でつまらない。もし布と裁縫道具を送ってくれば、東京の子どもたちのためにお手玉をいくらかでもつくってやれるのに」という話を聞いた。そこで、帰京後、おもちゃ美術館の関係者にこの言葉を伝え、お手玉の材料がすぐに、大量に集まってきた。そこで、それを4月下旬に直接お持ちしたところ、大変喜ばれて「すぐにやっべしやっべし」と、またまたお手玉大製作会となった。完成したお手玉は、現在、

東京おもちゃ美術館から被災地へと送られるおもちゃセットの中に入れてられている。

このエピソードは、お年寄りにとっても「おもちゃ」や「遊び」が生活の中で大切な一要素であり、生きがいを取り戻し、また支援される一方だった関係性が大転換するきっかけを作った好例だと思う。人のために頑張ることで、自分も元気になる。「おもちゃ」がそういう機会を引き出してくれたのだと思う。

私たちは、被災地に「おもちゃ」と「遊び」を届け、子どもたちの心のケアを行うことに主眼をおいて活動を始めた。その成果は、被災地版「おもちゃの広場」で見られる子どもたちの笑顔や、実施後に送られてくる報告・お礼状等々を読めば明らかである。しかも、子どもの笑顔や元気が周りの大人をも元気づけた。さらに、「おもちゃ」や「遊び」は、大人をも元気にするという事例をいくつとなく見た。

東京おもちゃ美術館は今後、被災地支援をどのように進めていくべきか、ただ今、模索中であるが、まだまだ長期的な支援が必要な中で、今後も私たちはNPO法人としてできることを継続的に実行していきたいと思っている。



「おもちゃ」「遊び」で笑顔が広がる(気仙沼市・はまなすホール)



木育は心の癒し